

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

61年9月現在 会員数
逗子地区 168名
葉山地区 286名
大船地区 60名
(合計) (514名)

61年9月号 (170号)
発行 者 根岸岳 萃
編 集 者 中村愛 岳

吟詠の楽しみ

唐木山 石川 忠義

私がK中学校に在職していた時、偶々、若い先生の結婚式に招待され、その時校医の先生から、このような良い漢詩がある、それを吟じなさい、と申されたのが、詩経にある「桃夭三章」でした。然し残念なことに一度も吟じたことが無いので、止むなく朗読して責を果しました。

それから数年後、前任地の学校が廃され新設校に移ることになりました。この学校は、満六年在職した想い出の多い所で、この時、国語担任の先生が、懐しい気持ちを胸いっぱいにくらませて、朗々と吟じられましたのが、王維の「渭城の朝雨」でした。終りの「無からん無からん故人無からん」を繰返し吟じられました。この時も詩吟の良さをつくづく感じました。

然し自分から進んで習う機会が得られず、その後も幾度か「桃夭三章」を朗読しました。其の都度吟じられたらと思うことが屢屢でした。その後H中学を経てからO高校に移り、又も漢詩、漢文、古典を教えましたが、詩を吟ぜられたら生徒達もどんなにか喜ぶことであつたらうにと思われるので

した。

このようにして本年三月で現職を去り、漸く詩吟を習得する機会に恵まれました。未だ日も浅いのですが、練習の都度、漢詩の良さをじっくりと味わうことが出来るようになりました。まだまだ未熟ですが吟ずる楽しさがいっぱいこの頃です。

「桃夭三章」

とうりよう

ある日、寺脇先生から、今度うちの教室に漢詩に詳しい先生が入ったという事を聞きました。お名前を聞きましたら、もと教師で石川忠義さんという。私も何となく名前を存じあげていたので、ぜひ月報・碩心に何か書いてほしいとお願いしましたら前記の記事をいただきました。

ところが文中の「桃夭三章」のくだりについては、お恥ずかしいのですが、習った事もなかったもので、それとなく辞典や詩の本をめくってみました。そしてある方から中国古典選なるものをお借りしました。中国最古の詩集「詩経」の中にある「桃夭三章」を自分の勉強がてら、主なところを抜萃し、参考になればと書いてみることにいたしました。

桃之天天 桃の天天たる
灼灼其華 灼灼たる其の華
之子于華 之子の于き帰げば
宜其室家 其の室家に宜しからん

桃之天天 桃の天天たる
有賁其美 有に其の美は賁たり
之子于帰 之子の于き帰げば
宜其家室 其の家室に宜しからん

桃之天天 桃の天天たる
其葉萋萋 其の葉は萋萋たり
之子于帰 之子の于き帰げば
宜其家人 其の家人に宜しからん

詩経の第一巻、周南の巻に収められている歌。いわゆる正風（黄金時代の歌という意味）の、よき時代の幸福な女性の歌である。貴族の娘の結婚を祝い歌であろう。女性と花とは似つかわしいものだが、この歌のヒロインは、明るく華やかでしかも健康な桃の花にふさわしい娘である。若々しく青々と茂った桃の木に、今を盛りと咲き誇る桃の花。歌びとは桃の花から自然に娘に思いをはせる。あのひともしやお嫁入り。あの人がお嫁になったら、きつと家の

人たちに喜ばれるいいお嫁さんになることだろりなあ。民謡ふうの歌のならわしとして、歌びとは同じ感懐を、少しずつ目先を変えて、何度かくりかえす。丸々とした大きな桃の実を、こんもりと茂った桃の葉を思い浮べながら。

語

（灼灼）は花の咲き誇っているようす。

（室家）・（家室）とは同じ意味で、夫婦の

一組を単位とする家庭。押韻のつごうにより言い方を変えたもの。

（萋萋）は葉のこんもり茂っているようす。

（家人）は家室より広い家族全範をさす。

さしづめ日本でいえば民謡の祝い歌・詩吟ならば結婚祝の詩のようなものではないかと私なりに思いました。

自然と人生（九月）

（秋分）

……彼岸の中日はなれば、近在の老幼男女藤沢に鎌倉に寺詣りして帰る者、織るが如し。川辺には簦を釣る者、多く並べり。午後の日悠々として、碧潮川に満ち……

九月廿三日

吟の道を求めて (25)

松井 岳洋

彼が漢詩の朗詠に韻詠を取り入れて、吟の総体を纏めたのは、大野孤山先生作詩の「舟艇守の尺八」が最初であった。

先生から「韻詠を入れて聞かせて下さい」と言われ、彼は「大変な宿題を出されてしまった」と困惑したが、反面「そうだ、先生は自分の実力を試して下さるのだ。それにお応えして頑張ってやってみなくては」と考えた。

「先生！それでは纏まるかどうか、やってみます。少しの間、お暇を下さい」と言って立あがる彼を、先生は「ははアー例の所へ行くのだな。」と直感され、急いでお握りを作って渡してくれた。彼は「直きに帰って来ますから」と辞退したが「まあまあ持つて行きなさい。必要なこともあるから」と無理に持たせた。

好意を謝して、彼はやはり先生が直感された通りのいつも行く浪子不動先の岩場に行つたのだ。一昨晩この岩場に来て、家を失った失意を夜通しの吟によつて慰められたのが今ひとしお憶われ、また、今まで長い間の岩場で誰にも邪魔されること

無く吟の修練をして来た事が懐しく、ここならよい吟の工夫も出来る様な気がするのであった。

暫くは詩文を繰返し読んで居る内、昨日のボート番の青年と先生の出合いの場面がありありと鮮明に思い出され、この詩がその時のことを余すことなく表現しているのに改めて畏敬の念を抱くのであった。

「炎熱の夏は去りて秋風来る。風は清し湘南逗子の渚。微かに聞く洞簫の遙かに漣を渡るを。杖を停めて耳敬つれば千鳥の曲。この曲老来忘るる能わず。昔提督八代の愛曲……」ここまで吟詠して見たが、どうも自分の気持にびつたりしない。どうしてだろう。そうだ、作者の気持になつたら「この曲老来忘るる能わず」はもつと感慨を籠めてしななければならない。それには吟詠調より韻読の方が良いかも知れないと思ひ、「このォー曲、老来」と低く、きわめて感慨深げに韻読してみた。

今度は作者の気持に添う様な気がして「この曲老来忘るる能わず。昔提督八代の愛曲。四十五年一夢の中。哲人一たび去つて復帰らず。一笑の聲音能く昔を映して。竹に問う近代勇士の心」までの六句を韻読し「涙雲日を蔽うて将に人をして泣かしむ。秀嶺見えざるは反つて情有り。去らんと欲

して低徊去る能わず。室に入って簾を見れば純忠の土」の結句を吟詠し、「涙雲……」を半高音で吟じ出し、「去らんと欲して……」を声を張って吟じて見たところ、何とか纏まりがつきそうであった。よりやく朗吟と韻読との総体的まとまりが出来たような気がして嬉しくてならなかった。

ほっと一息ついた時は、正午を一時間も過ぎてゐるのに彼は気付いた。

◇右は総本部発行「吟道」に連載された松井先生の「吟の道を求めて」より転載させていたゞきました。「韻読」なるものをまとめられた時のことを書かれたもので、彼とは松井先生のことです。

県本部主催

指導者講習会のお知らせ

とき・61年10月12日(日)
ところ・平塚農業会館

俳句 岩崎 恵岳

ほととぎす 陶土練る手の力抜く

岩たばこ 壺の絵付に彩添へて

窯の焰に 心燃やして明易し

窯出しの 刻を遅しとほととぎす

想ひ出の 切れ目をつなぐ川蜻蛉

頭の体操

さあ、読んでみましょう

左記は吟道教典一、二、三巻にある吟題です。読めますか？

- | | |
|----------------------|------|
| (1) 題ニ道灌借レ義図 | 1/21 |
| (2) 題下不識庵撃ニ機山ニ図上 | 1/29 |
| (3) 将ニ東遊ニ題レ壁 | 1/39 |
| (4) 題下児島高德書ニ桜樹ニ図上 | 1/61 |
| (5) 送ニ元二使ニ安西 | 1/92 |
| (6) 逢ニ入レ京使 | 1/99 |
| (7) 戊子夏与ニ諸生ニ月レ見偶成 | 2/4 |
| (8) 送ニ子和之ニ参州 | 2/7 |
| (9) 月夜三叉江浮レ舟 | 2/8 |
| (10) 九日後朝同賦ニ秋思ニ応レ制 | 2/32 |
| (11) 回レ郷偶書 | 2/73 |
| (12) 香炉峯下新トニ山居 | 2/95 |
| (13) 草堂初成偶題ニ東壁 | 3/10 |
| (14) 舟発ニ大垣ニ赴ニ桑名 | 3/21 |
| (15) 貴者四章有レ感ニ於時勢ニ而作也 | 3/54 |
| (16) 宴ニ城東荘 | 3/59 |
| (17) 春行寄レ興 | 3/62 |
| (18) 江樓書レ感 | 3/64 |
| (19) 醉下ニ祝融峯 | 3/70 |
| (20) 憫レ農 | 3/78 |
| 酌レ酒与ニ裴迪 | |

練吟メモ

○新教本になって、いまだになじめないのは「人間」という読みではないかと思えます。そこで今回は「人間」を（じんかん）と読むか（にんげん）と読むかを判断する資料を提示してみました。理解の便に、始めに例題を掲げます。（教本どおり）

教本(二) 74 山中問答 李白

（結句）別に天地の人間に非ざる有り

（解釈）俗世間を離れた別の天地があるということを痛感する。

○手もとの辞書で「人間」を引いて見ると

一、詳解漢和大典（富山房）・広辞林（三省堂）・広辞苑（岩波書店）などは、いずれも（にんげん）と読んでいます。

二、大漢和辞典（大修館）・新字鑑（弘道館）は（ジンカン）と（ニンゲン）を併記または列記しています。

三、ジンカン・ニンゲンのいずれに読んでも語釈は右の辞典どれでも同じようです。

(1) ひとの世、この世。人世、世間。

(2) ひと、人類。（日本語として使用）

○さて、「山中問答」で「人間」と訓読している学者は次のとおり（上記は著書名）
一、和漢名詩類選評釈 簡野 道明

新選唐詩鑑賞

内田泉之助

李白（講談社現代新書）

福原 龍蔵

二、「人間」としている学者（上記著書名）

漢詩の作方 実践女大教授 新田 大作

唐詩新釈 代々木ゼミ講師 多久 弘一

漢詩の風景 桜美林大教授 石川 忠久

※参考

ご承知のとおり、新田教授は岳風会新教本の監修者であり、石川教授は全国漢文教育学会会長で、昨年四月からNHK放送(3)の「漢詩をよむ」の講師を勤めています。

○中国では、ひとの世の意味のときは人間という字をつかい、日本で言ういわゆる人間の間とは単に「人」一字をつかうようです。人間説の石川忠久教授も「人間」は從來「にんげん」と読む習慣になっているが

「人の世」「世間」の意の場合には「じんかん」と読み、仏語や俗語では「にんげん」と読むのがよい、と本に書いています。

○先に物故された京大名誉教授吉川幸次郎先生は「別に天地の人の間に非ざるあり」と訓読されていたが、それはともかく、岳風会という大きな組織の中にあつては、教本に従うのが本筋と思われる。四十才前の人は、高校漢文で人間で習ったから、いま人間の読み替えるとかえて混乱するということも考えられます。（つつく）

ボケナイコツ

酒味より趣味を

酒でウサをはらす酒味の人があります。怒りとアルコールは高血圧のもと。高血圧はまたボケの恋人でもある。結局自らボケ街道をまっしぐらに進めさせているわけです。趣味には定年退職がない。そしてボケないためには「鑑賞型」よりも「実践型」の趣味の方がよい。絵画をみるより自分で絵を描く、植木を眺めるより自分で作ることなど。そして尚創造的なものほどボケを防ぎます。短歌・俳句・絵画・吟詠など大いによい。人間の脳は使えば使うほど達者になります。「気は使うな、頭を使え」。いい言葉ですね。そんな意味で投稿など特によいと思います。どしどしお寄せ下さい。

(入会)

763 田中セツ子 逗子市沼間二一六一五奥村方

(真 澄) (電)〇四六八一七二一二三二八二

(退会)

31 村川幸風(大船A) 77 荒谷易風(逗子B)

710 田淵九竜(大船A)

